

# 文系学生の生成 AI 活用を促進する論文指導の実践

設楽 馨<sup>1)</sup>, 加藤 祥<sup>2)</sup>

1) 武庫川女子大学 文学部日本語日本文学科

2) 北海道大学 大学院文学研究院

## Practical Guidance for Thesis Supervision to Promote Generative AI Utilization Among Liberal Arts Students

Kaoru Shitara<sup>1)</sup>, Sachi Kato<sup>2)</sup>

1) Department of Japanese Language and Literature, School of Letters, Mukogawa Women's Univ.

2) Faculty of Humanities and Human Sciences, Hokkaido Univ.

### 概要

2025年9月時点、文系学生の論文作成において、生成AIが文章構成・日本語校正・データ整理・仮説検証など多方面で活用されている。本稿では3大学の事例を取り上げ、先行研究に無いものとして特に、文献要約・表作成・文章サンプル生成・文体分析などの場面で活用を含めた。また、論文指導の段階に応じて、初期（素材収集）、中期（構成・仮説）、終盤（校正・要約）のように活用方法を使い分けることで、効果的な指導が可能であることを示す。今後、個別的経験を書く有用性が高まるなかで、学生の主体的な活用はより一層、促進されるものと考えられる。

## 1 はじめに

2025年9月時点で、生成AIを取り入れた文章系授業事例の新しいものには、留学生の文章作成時Web/AI有無の違い<sup>[1]</sup>、外国人留学生の校正<sup>[2]</sup>、大学教育におけるアイデア創出から完成まで<sup>[3]</sup>などが認められる。一方で、2004年と早くからW大学で文章支援（アカデミック・ライティング）に取り組んできた佐渡島沙織氏の近年の記事には、AI時代の文章作成指導への指摘が認められる<sup>[4][5]</sup>。また、認知科学会では2024年6月に生成AIを使うSF小説家の話から、学習支援に関する誌上討論<sup>[6]</sup>を展開した。

一方、大学全体で見れば、高校の「情報」科目で生成AI活用の授業を受けた学生とそうでない学生が混在し、プログラミングを日常的に行う理系学生もいれば、ICTや生成AIを学習に巧みに取り込むイメージがまるでわからない学生も存在する。今後の社会での生成AI活用を考慮すれば、日々、活用方法が変化・進歩する大学の事例は看過できない。

本稿は、文系学生の論文指導にて活用促進することを目指し、3大学における生成AI活用の現状を観察するなかで、活用促進の場면을整理し、具体的な指導を提言したい。

## 2 3大学の特性とそれぞれの文章力

### 2.1 先行研究

文章力に関して、森口（2023）<sup>[3]</sup>にまとめられた「日本人であるにもかかわらず」学生が持つ問題点を、大学生の文章力の指標として抜粋する。

誤字脱字 / 変換ミス / 不自然なコロケーション / 似た単語の混同 / 単語の誤使用 / レベルの異なる単語の並列（たとえば、横浜と岩手と九州） / ねじれ文 / 助詞の間違い / 話し言葉の使用

ほかにも、「少し文章を書き慣れている学生には1文の長さが不必要に長くなる傾向」やレイアウトの不自然さなど（以上、p.182より）が指摘されている。これらを指標に、本論で観察する3大学の大学生の文章力を検討する。

### 2.2 A大学

A大学は関西圏に位置し、対象学生は総合女子大学の文学部日本語日本文学科に所属する。1学年150人は2年次に手書きで課題作成する「文章表現演習I・II」を必修とし、誤字脱字や不自然なコロケーションのほか、文章構成のレベルでも指導を受ける。その後、3年次に必修ゼミがあり、

筆者・設楽担当の「演習Ⅰ」受講生 12 名を対象に、後に挙げる生成 AI 活用の論文作成に取り組んだ。

対象学生が 2 年後期時点（2025 年 1 月）、件の「文章表現演習Ⅰ・Ⅱ」を受講し、計 10 回の小論文執筆と添削があり、先行研究で見たような問題点はおおむね解消されている。ただ、一定数、「1 文の長さが不必要に長くなる傾向」がある。

### 2.3 B 大学

B 大学は首都圏に位置し、対象学生は総合大学の外国語学部日本語・日本語教育学科に所属する。1 学年 40 人で、1～2 年次に、アカデミックライティング科目として必修の「日本語表現演習Ⅰ・Ⅱ」を受講済みであり、レポート作成に必要なスキル修得をしているほか、「国語応用演習（読解・表現）」「専門レポート演習」などを選択受講している学生もおり、基本的な論文作成技術は修得できるものの、不自然なコロケーションやねじれ文が主な課題となっている。

また、3 年次および 4 年次に必修ゼミ（卒論指導）があり、筆者・加藤担当の「日本語・日本語教育専門セミナー」受講生 9 名は、後に挙げる生成 AI を活用した論文作成に取り組んだ。

### 2.4 C 大学

C 大学は北海道に位置し、対象学生は総合大学の全学教育（教養科目）「思索と言語」で講義名「文章分析入門」の受講生（2025 年度は 70 人程度）である。文系・理系はほぼ半々が受講した。レポート作成において多様な AI 活用が確認されている。

## 3 論文構成で活用する

不十分なプロンプトにて生成 AI を使えばハルシネーションが多く発生する、と知られている。十分なプロンプトはどの程度のものであるのか。

A 大学の 12 人を 2 人ずつ 6 ペアに分割、論文の構成を学ぶために生成 AI 活用を模索させ、完成したものの非論理性を観察、修正箇所を話し合った後、個別にミニツッパパーで活用課題を提出させた（90 分授業 3 回で展開）。

生成 AI 活用以前に、論文に必要な調査やデータとして、日本語の実現形（実際に発話や文章の中で用いられる言語の形式。ここでは学生が絵本から抽出した色彩語や人称詞など）を一定数、集め

た。このデータの傾向を予測させ、5,000 字の論文を作成する。論文構成は、石黒（2012）の「論文の六つの基本構成」<sup>7)</sup>を参照させた。

ただし、個々のプロンプト入力に詳細な指示はなく、学生自身が試行錯誤した。活用した生成 AI は、A 大学でアカウント管理可能な Microsoft365 Copilot、Gemini、Gems、NoteBookLM を推奨し 6 ペアでは Gemini、Gems の活用が多かった。

### 3.1 字数と構成

データ補充、論文作成に 2 時間ほど割き、6 本の論文が完成した。

字数は 4,400～5,900 字（平均 5,188 字）、構成はいずれも序論（目的や資料・方法）、本論（結果と分析、考察）、結論に準じるものに区分けされている。先行研究を挙げた論文は 1 本のみ、分析と考察はあっても、十分な文献を検索して提示することは出来ていない。（なお、先行研究は出典がないか、出典があっても国立国会図書館サーチで確かめても存在しないものである。）

### 3.2 論文タイトル

6 本の論文タイトルは次の通り。各ペアが収集していた実現形に下線を引く。

- (1)絵本における比喩表現が子どもの非認知能力を育むメカニズム
  - (2)絵本の比喩表現に見る文化的価値観—日本とヨーロッパの比較—
  - (3)動物の一人称から見る絵本の特徴
  - (4)絵本における季語と色彩表現の相互作用:日本の伝統色と文化的固定概念からの考察
  - (5)形容詞の割合でみる絵本の特徴
  - (6)絵本の語彙的特徴と対象年齢の関係性に関する考察
- (1)と(2)は比喩表現を集め、(2)は作者の出身地・出版地も調べて結果を対照した。(3)は、動物が登場する絵本に限定した。この 3 ペアは、調査設計からデータ作成が早いいため、結果的に文章作成の作業時間の比重が重い。(3)は比較的、ハルシネーションが抑えられていた。
- (4)は色彩語を収集後、季語との関連を調査し

た。(5)も調査後、対象とした絵本を3つの年齢層（未就学児、小1～3年、小4～6年）に分割して再調査した。(6)は、色彩語を収集予定だったが、最終的に語彙的特徴（総語数、文体指標MVR、語種等）と対象年齢を分析した。後半の3ペアはデータ作成に時間をかけ、文章作成の時間が少ない。特に(4)は次のように、さも普遍的に自明のように断定して記述する例が多く認められた。

日本には、古くから自然の移ろいや人々の暮らしの中から生まれた豊かな伝統色が存在する。これらの色は単なる名称ではなく、(中略)我々日本人の色彩感覚の基盤を形成している。伝統色を理解することは、日本人がいかに自然の移ろいを繊細に感じ取り、それを美意識として昇華させてきたかを理解することに繋がる。

### 3.3 学生の気づき

ハルシネーションに対し、学生の2ペアを組ませて計4人で意見交換させると、「なぜ？」「決めつけている」と感じていた。3.2に引用した(4)の伝統色に関する記述には、「よくわからない」とのコメントが付された。

最後に提出したミニツツペーパーから、当該学生の今後の活用法としての気づきを確認する。

- ・構成案のアイデア出しと日本語校正
- ・文体の整理
- ・比喩表現の分類（直喩・隠喩の区分）

そのほか反省点であり、活用しにくいと感じたこととして、根拠や漠然とした述べ立てを確認する負担の大きさを指摘した。

この結果から、文系学生に対しては、出来るだけ論文制作過程のどこで、どのように、という具体性を持って生成AI活用を促すことが有用だと思われる。

## 4 日本語校正で活用する

参考文献[2]の外国人留学生の事例にもあった通り、日本語校正として文や形式を一括して整えることは学生の間で広まっている。B大学は一文ごとの適切さの確認に使う。長くまとまった文章の全体を作成させることは不可能であるとの実感

を得ているようであり、レポートや論文全体を安易に生成AIに出力させるという例は見られなくなってきた。しかし、既存ツールの代替としての使用や、内容と直接関わりのない部分での使用が散見される。このように短いまとまりで用いる様子は、生成AIをあたかも道具として「使い倒す」<sup>17)</sup>と言えるのではないだろうか。

### 4.1 ねじれ文・多義文などの発見と修正

学生がこのように書きたい、というプロンプトで生成した文を読み、学生自身が理解できる文かどうか判断させると、文の正確さや整合性を確かめることができる。

たとえば、以下の例のように複数の動詞が含まれる文で複数の動作主を想定している場合、生成AIは最もあり得る主語を定めて書き換えるため、概ね一文の主語を一つとする傾向がある。そのため、学生は言いたいことが言えていない（誤読される）可能性に気づき、読みやすい文への修正を自ら試みることができる。これにより、教員の日本語校正作業が大幅に減じた。

例) 各課題では、課題の理解や技能の習得を意識しながら、取り組みを通して少しずつ成果を積み重ねられるよう繰り返し実践してきた。(原文：著者により一部を改変)

→学生は各課題において、課題の理解や技能の習得を意識しながら、取り組みを通して少しずつ成果を積み重ねられるように繰り返し実践してきた。(ChatGPT mini)

→各課題の設定においては、生徒の課題理解や技能習得を意識した。生徒が取り組みを通して少しずつ成果を積み重ねられるよう、実践課題を繰り返し実施した。(修正例)

### 4.2 文献リストの形式統一

学生が作成した文献リストを、APAスタイル(書誌情報の記載方法の一つ)に統一させるプロンプトを入力、その記述を確認して、一貫したAPAスタイルに整える。このとき、情報の不足している部分については【★】で示すなど、指定を加えることで適切なリスト作成を行う工夫が見られた。但し、2024年12月時点では、生成AIによる情報改変(特に著者名が改竄されるなど)が散見されたとのことで、形式統一後の変更点確認を行う必要が生じたようである。

## 5 データ整理と全体のブラッシュアップ ほかで活用する

3.3 学生の気づきに挙げた、比喻表現の分類のように、論文構成・日本語校正と異なる使い方に関して、C 大学ほかの事例をまとめて挙げる。特に C 大学「文章分析入門」は、日本語文章を文体論や表現論など言語的に分析する。その過程で、従来ならば表計算ソフト等を活用する場面ほか、既出と異なる生成 AI 活用が進んでいる。

### 5.1 データの計量・表作成

文系学生は、スマートフォン操作に長けていても、パソコンの各種ソフト、中でも、Excel などの表計算アプリケーションを使う経験に乏しいことがある。そのせいか、文章分析の初歩として、文の数をはじめ、全文の語数や文字数などの計量を行う場合に、表計算アプリケーションを使わずに、生成 AI を活用する例が認められた。計量結果を表にまとめることも可能であるため、従来のレポートでは、表計算アプリケーションで作成していたような表が、関数や機能操作をすることなく挿入するようになっている。生成 AI の活用により、理系学生が Python をはじめとするプログラミングによって出力した結果と同等の内容物が作成されるようになっている。

### 5.2 文章サンプル

レポートの作成にあたり、調査対象サンプルや対照のためのサンプルを生成 AI に出力させる例が見られる。引用や著作権に配慮することなく、使用した生成 AI とプロンプトを記述することにより、様々な文章サンプルを使用することができる。分析のための文章として、自らの仮説の検証に適した実在するサンプルを探し出す必要もない。

なお、実在のサンプルと生成 AI の出力を対照する場合、生成 AI の出力の誤りの指摘はプロンプトや生成 AI の問題分析となるため、直接的な批判を行う必要がないとし、あえて既存のサンプル使用を避けた例も見られた。

### 5.3 批評・ブラッシュアップ

実際の調査を行う前段階として、生成 AI を用いた仮説の整理が行われていた例、特徴を生成 AI に分析させ、それらを検証させる例なども散見さ

れた。たとえば、ある調査対象について、先行研究で言われている、あるいは「一般に言われている」特徴などについて、検証したい、もしくはそれらが本当であるのか疑問が生じたという場合などに、生成 AI により調査対象らしいサンプルを生成させることで、「一般的な」特徴が反映されているのか、その他の特徴が目立つのか、実際に「らしい」のか試行するという例がみられた。仮説を整理し、実際の調査に臨むことにより、省力化が進んでいるといえる。

そもそも問いを立てる際に、生成 AI とのチャットを用いたブレインストーミングや整理を行っているとの話も聞く。また、実際に、生成 AI によって出力された特徴を仮説として、それらの検証を行うという、問いや仮説の整理、先行研究の調査を省いたレポートも見られた。生成 AI の出力を批判する場合には見識不足等による誤りが回避できることから、仮説通りではないことに対する考察に際してもサンプル生成をさせる場合と同様に、あえて生成 AI の使用が選択されている可能性がある。

### 5.4 先行研究の理解

生成 AI に要約をさせることはままある。完成後の論文の要約をして、概要とすることが考えられる。ほかにも、先行研究を要約させる例がある。

先行研究を得るには、筆者らの専門分野（日本語学）では、日本語研究・日本語教育文献データベース（国立国語研究所）が存在し、検索ワードを入れて雑誌論文等を集中させ、インターネットを介して PDF ファイルで入手したり掲載雑誌を確認したりできる。B 大学は、他研究機関の雑誌を無料で取り寄せることが可能で、どこにあるのかが分かれば比較的、負担なく関連論文を収集できる。

しかし、検索ワードが不明なまま、先行研究となる文献を探す場合がある。すると、生成 AI を活用して単語ではなく、話しかけるような短文でのプロンプトによって検索結果を得ることがあった。検索結果から導かれた文献を読むにも、生成 AI に読ませて要約し、要約を読むことでどういった文献なのか、理解を深めることが可能となっていた。

ただし、実際に論文に引用するには、全体の要約が必要なのか、何を論じるためのどういった引用部分が必要なのか、といった論文における必要

性や引用箇所の適格さを判断できなくてはならない。生成 AI に出来ることは要約までで、その要約文を経て先行研究を理解するとともに、論文の目的や研究課題の深化を促すことが可能である。

## 6 提言

本稿は、文系学生のレポートや論文作成における生成 AI 活用の現状を観察した。ここまです統括し、論文指導にて活用促進するための提言を示す。

先行研究にも認められた日本語校正やアイデア創出に加え、生成 AI はプログラミング知識が乏しい文系学生も、自然言語でプロンプトを入力できる、というメリットが大きく、文系学生のレポートや論文において、データの計量や表計算にも、表計算アプリケーションではなく、生成 AI が活用されるようになってきている。

また、調査対象サンプルや、著作権に配慮しないでよい文章サンプル、仮説検証に適したサンプル生成といった、文章サンプルの作成にも有効である。さらに文系に限らないが、論文制作の過程で立てた仮説の批評、生成 AI によって出力された特徴を仮説としてさらにブラッシュアップするにも、活用している傾向が見られる。

こうした活用方法を論文指導の段階で分けて取り入れるならば、初期では、論文の要素としての文やデータ、サンプルを得る場面での活用が挙げられる。先行研究の要約も、短時間で資料を理解するのに活用できるだろう。

論文制作の中期では、こうして得られた要素を元手に、生成 AI とのチャットを重ねると、ブレインストーミングや整理が進み、論理の軸となるパターンや特性を見出し、仮説を立てることが可能になると予想される。

論文制作の終盤では、仮説検証やまとまった文章の校正、要約に生成 AI 活用を促すといったことが考えられる。

以上、論文制作の進捗に合わせた活用法を示唆することで、本稿では文系学生の論文指導にて生成 AI の活用促進を目指した。学生自身が試行錯誤していけば、文の、あるいは、論文の適格性を批判できるようになり、そうした小さく区切られた範囲での生成 AI 活用が、今後、より一層進むと予想される。このように制作が進む論文は、内容として個別的な経験の有用性が高まり、そうした経験と書き手の距離を置くような、客観的な表現を確保するための生成 AI 活用はより一層、進んでい

くものと考えられる。

## 参考文献

- [1] 大島弥生・石毛順子、日本語課題文章作成時の過程と意識は Web 検索・言語生成 AI 使用の有無によってどう異なるか—中国語母語話者大学院留学生 3 名に対する調査結果をもとに—、専門日本語教育研究、26、pp.43-50、2024 年
- [2] 高橋律、外国人留学生向け論文指導方法の改善 — 生成 AI 活用の視点から —、中央学院大学人間・自然論叢、56、pp.67-81、2024 年
- [3] 森口稔、生成 AI を利用した文章教育試案、Ignis、3、pp.179-190、2023 年
- [4] 佐渡島沙織、大学生のレポートで散見される「剽窃」や「思考の放棄」、AI 時代に必要な「書く力」の育て方、東洋新聞 education 特集、2025 年 9 月 10 日
- [5] 佐渡島沙織、AI 時代のライティング指導「体験から問いへ」支える、日本経済新聞電子版、2025 年 6 月 23 日
- [6] 高橋麻衣子、多様化する生成 AI と学習支援：学校教育はどのように変革するのか（誌上討論 生成 AI と創作活動）、認知科学 第 31 巻、第 2 号、pp.386-389、2024 年
- [7] 原田悦子、道具としての生成 AI を「使い倒す」人たち（誌上討論 生成 AI と創作活動）、認知科学 第 31 巻、第 2 号、pp.394-398、2024 年
- [8] 石黒圭、この 1 冊できちんと書ける！論文・レポートの基本、pp.14-19、日本実業出版社、2012 年